

柳田国男と「事大主義」

同時代の言説空間における意味的特質

室井康成

Yanagita Kunio and "Worship of the Powerful": Characteristics of the Meaning in Contemporaneous Discourse Space
MURROI Kousei

はじめに

① 明治の言説空間における「事大主義」

② 「事大主義」は「民俗」発現の原動力か
おわりに

【論文要旨】

「事大主義」という言葉がある。一般的には、時流や大勢に身を任せることで自身の安息を図ろうとする、自律性・主体性を欠いた人間の態度を指す言葉だとされる。政治学者の神島二郎によると、柳田国男が民俗学研究を通じて説明しようとしたものこそ、日本人の「島国性と事大主義」であったという。

「事大主義」という言葉自体は、明治の啓蒙思想家・福沢諭吉による造語であると考えられ、それは隣国朝鮮の政府内で、清国との冊封体制の維持を目指す。独立の気概なき一部勢力の固陋性を指して使用されたが、やがてそれは、朝鮮もしくは朝鮮人全体の後進性を表象する蔑語として近代日本の言説空間に定着した。しかし、日露戦争後になると、日本人自身のうちにある非自律的・非主体的な思考を「逆照射」して表現する言葉へと変移してゆく。柳田国男が「事大主義」を論じ始めるのも、まさにこの時期であり、それは周囲の他人に生活レベルを合わせ、あるいは過去の前例に従って行動することを是

とする人々の思考方法を指していた。柳田の言う「民俗」とは、そうした「事大主義」の横軸と縦軸との交点に具現するものとして捉えられていた蓋然性がある。

柳田によると、人が海岸線に沿って移動しやすい「島国」であるからこそ、新住民が旧住民に拝跪する「事大主義」が、時と場合を問わず生起するのだという。ゆえに「事大主義」は「島国」である日本の特質だと言える。このことは、柳田に人々の選挙における投票行動を通じたファシズムの状況の招来を予測させたが、それは十五年戦争への突入と大量の死傷者を出した末の日本の惨敗によつて現実となった。戦後、柳田が「島国性と事大主義」の説明を目指したのは、それが「民俗」を具現させる主要因であるためであり、逆に「民俗」を問うことで、彼は、戦争へとひた走った人々の心意を解こうとしたのだと思われる。

【キーワード】 島国性、福沢諭吉、朝鮮認識、「民俗」、ファシズム